

第一編

中支戰線從軍の記

一、支那事變の概要

日本陸軍は、北清事変（明治三三年・一九〇〇）の議定書に基づいて、北京天津地区の一部に約一個旅団の兵力を駐留させ、これを「支那駐屯軍」と呼んでいた。

昭和十二年（一九三七）七月七日夜、北京郊外の蘆溝橋付近で演習中の駐屯軍小部隊が中国側から不法射撃を受け、これに応戦した。いわゆる蘆溝橋事件である。この事件は、日本側にとって全くの突発事件であり、政府は直ちに不拡大方針のもと現地解決に努力したが、日支双方の不信感と敵対感情はいよいよ深まり、衝突は随所に拡大していった。

陸軍の当局は、七月二十七日、内地の三個師団に対し、戦時動員を実施して北支に派遣することに決した。この中に我が松江連隊の所属する「姫路第十師団」も含まれていた。軍当局は、当初、北京天津地区の敵を制圧し、この事件に一段落を画す計画であったが、逆に戦局は拡大の一途を辿り、ついに戦火は北支中支へと拡大、軍部も次々と内地部隊を動員して戦場に送った。

昭和十二年十二月十三日、首都の南京を占領するも、戦火は中国全土に拡大し、戦局はまさに泥沼化の様相を呈するに至った。これが、いわゆる「支那事変」である。支那事変

は、いよいよ戦闘地域が拡大し、戦争が長期化するに及んで、英米を中心とする国際連盟の我が国に対する抗議も激しくなり、ついに、この事変は、米英を巻きこんだ世界大戦へと発展した。

二、師範学校入学

(1) 従兄の戦死

昭和十二年七月七日、北京郊外の蘆溝橋事件を契機として、支那事変が勃発した。陸軍は、七月二十七日、姫路の第十師団に対して動員令（戦時部隊編成）を発した。第十師団の配下である松江の第六十三連隊にも動員が発令され、多数の在郷の予備役兵に対して召集がなされた。

当時、私は松江中学校の五年生に在学していた。私の本家の、小松修さんにも召集令状（俗に赤紙といわれるもので、これを受けた者は、速やかに入隊する義務がある。）が届けられた。私の家は、本家の敷地内に在って、本家の人たちとは同一家族のような関係であった。本家には、村長を勤めていた祖父と祖母、それに従兄^{いとこ}の修さん夫婦が住んでいた。

従兄は、平素から万事氣さくで朗らかで、周りの人たちから特別に親まれ、私たちにとつては、従兄というよりむしろ兄弟のような存在であった。

その修さんが、召集によつて古志原の六十三連隊に入隊したのは、七月下旬。そして、八月八日には、万歳歓呼に送られて松江駅から出征していった。そして神戸港より乗船し北支天津の外港である太沽^{タイク}に上陸したのが八月十六日である。

いったん、天津に集結した連隊は、戦火急を告げる津浦線^{しんぽ}に沿つて南下、八月二十九日ごろより、逐次交戦を反覆しながら南下前進を続けた。

修さんは、事変勃発から間もない九月十五日、天津の南々西約六〇キロメートルの「南趙扶鎮」の戦闘で、不運にも戦死をしてしまった。

やがて、遺骨が帰還し、「村内戦死者第一号」として村を挙げての盛大な村葬が行われた。村長であつた祖父も、また村の在郷軍人会の会長であつた父も、世間に対して「洵に名誉なこと」として、悲しみ等は素振り^{そぶり}も見せなかつたが、この事件が、私の人生を決める上で重大な出来事となつてしまった。

というのも、中学校五か年の課程の卒業を目前にして、生涯の進路を決める進学校を選択する時機に當つていたからである。洋々たる人生の夢を頭に描きながら、進学校をあれこれと見比べていたちようどそのころ、突然、父から

「師範学校に入れ」

と命ぜられてしまった。当時、私の一族から教師になった者もなければ、私自身教師になろう等ということは、毛頭考えてもいなかったので、驚ろきもし頑強に拒否し続けたが、ついには、祖父や祖母も加わって、「頼むから師範学校へ行ってくれ、お前の生涯はみんな保証してやるから、とにかく頼む」というのである。

当時、何で師範学校なのか、何で教員なのか、わからなかったが、後で考えて見て、合点のいくことであつた。それは「短期現役兵」の制度のせいであつた。短期現役兵の制度というのは、師範学校の卒業生は、将来、国の小国民の養成という重要な仕事があるので学校卒業後は、短期間（五ヶ月間）軍隊に入れば、その後は兵役の義務を免除するといふものである。師範学校に行かせれば、体格のよかつた私でも兵役から逃れて、戦死というような悲惨な目にあわなくてもよいからである。家族は、口には金輪際行かせまいという氣持が強かつたのだ。

(2) 師範学校の生活

○和船漕ぎ 師範学校には、小学校の高等科から入学する五年制の一部と、中等学校を卒業して入学する二年制の二部があつた。私が入つたのはもちろん二部である。二部では、

自分が最も苦手とする音楽以外は、殆ど中学校の復習程度の内容で、さして勉強の必要も無かった。師範学校では漕艇の外に、手漕ぎ用の和船二隻を持っていて、常時一畑電鉄の北松江駅裏に係留していた。放課後の時間をもて余していた私は、早速船遊びに目をつけ、やがて夢中になった。何しろ山間部育ちで、海には縁のなかった私でも、櫓を押したり引いたりすれば、乗っている舟が動くのである。当初は同じところをぐるぐる回るだけだったが、少し馴れて櫓の引き手を加減すると舟はまっすぐに進み出す。

北松江から天神裏にかけて、自分の庭のようにして遊び回った。この舟遊びが、後のビルマ戦線で戦闘に役立ち、また、生還につながる重要な経験になるうとは、夢にも思わなかった。

○御親閲参加 昭和十二年に勃発した支那事変は、日を追って拡大の一途を辿り、支那全域に対して膨大な量の軍隊が派遣されたが、事変は一向に終息のめども立たない状態であった。私が二年生になった春、昭和十四年五月二十二日には、全国の学徒の志気を振興し、その自覚を高めるため、青少年学徒に対して勅語が發布され、全国中等学校以上の学校代表を宮城前広場に集め、天皇陛下による親閲の分列行進が挙行された。これは中等学校の正規授業の中に「教練」が課せられた十五周年記念式も兼ねて催されたものであり、いよいよ時局の重大さを感じさせる行事であった。

青少年学徒ニ賜ハリタル勅語

国本ニ培ヒ国力ヲ養ヒ以テ国家隆昌ノ氣運ヲ永世ニ維持セムトスル任タル極メテ重ク道タル甚ダ遠シ而シテ其ノ任実ニ繋リテ汝等青少年学徒ノ双肩ニ在リ汝等其レ氣節ヲ尚ヒ廉恥ヲ重シ古今ノ史実ニ稽ヘ中外ノ事勢ニ鑒ミ其ノ思索ヲ精ニシ其ノ識見ヲ長シ執ル所中ヲ失ハス嚮フ所正ヲ膠ラス各々本分ヲ恪守シ文ヲ修メ武ヲ練リ質実剛健ノ氣風ヲ振勵シ以テ負荷ノ大任ヲ全クセムコトヲ期セヨ

各学校からは、校長、教練教官、引率教員と、銃剣を着した生徒十名が選ばれて参列した。私の師範学校からは、専攻科生二名、一部生四名、二部生四名の十名で、私もその中の一人であった。全国から三万人余の学生が、二十列になって行進し、二重橋前の特設台上にお立ちになった天皇陛下に対して「頭右」の敬礼をする。生まれて初めて天皇陛下を見た訳であるが、陛下の猫脊の姿勢が強く印象に残った。

この頃から、学校内外も戦時色が濃くなり、春秋の農繁期には、出征軍人の家庭へ農事の奉仕作業に出かけるようになった。

○短期現役兵制度の廃止 前にも述べたように、師範学校の卒業生には短現（短期現役兵）制度という特典があった。すなわち、卒業後、入隊して五か月の訓練を受ければ、伍長の

階級が与えられ、後は後備役兵となつて召集の対象とはならない。これは、兵役から逃れたい者にとつては、もつてこいの制度であつて、実は、私もこれが目的で師範学校に入つた者である。

ところが、昭和十五年に入るや、戦局も拡大の一途をたどり、兵員も多数入用となつてきたという事情をふまえ「本春の卒業生より、短期現役兵の制度を廃止する。」というのである。私たちの一年前までの先輩たちは、この恩典に浴して、卒業後は軍隊とはかかわりなく教員として勤めているのに、私たちからは全く一般の男子と同様に徴兵検査を受け、甲種に合格すれば現役兵として入隊、また甲種に合格しなかつた者でも召集の対象となるのである。まさに運命の一大転換である。しかし事局いよいよ重大かつ困難となつたとき、また全体主義・軍国主義のもとで、格別に異を唱える者もなく承服せざるを得ないものであつた。

このため、我々の期が、師範学校卒業の現役兵第一期であり、それまでに考えもしなかつた師範学校卒業の戦死者を多数出すことにもなつた。

三、現役兵として入隊

(1) 徴兵検査

昭和十五年（一九四〇）三月三十一日付で、島根県鹿足郡津和野町尋常高等小学校の訓導（今の教諭）の発令を受け、早速同校へ赴任した。当時は、出雲部の出身者はすべて石見に赴任することになっていた。小学校では、五年生の身体虚弱児学級である第三組の担任を命ぜられた。師範学校の入学は大して乗り気ではなかったが、いざ教師となつて学級を担任して見ると、教員の仕事もけっこう楽しく、万事手探りながら夢中で勤務した。

赴任して間もない五月、家から「徴兵検査」の通知が来たので、遅くとも五日位前までには帰宅するよう連絡が来た。検査の数日前、受験者一同は村役場へ出頭を命ぜられて、担当の兵事係から、検査についてのこまごまとした注意があった。その中で、特に、身体検査では軍隊調の言動をすること、学科試験にはカンニングをしてもよいからよい成績を挙げよう話されたのが印象深かった。

検査の前日、役場の係員に引率されて受験者一同徒歩で受験地の玉造に向け出発した。玉造では、老舗旅館しにせの保性館で一泊、ほとんどの者が小学校での同級生なので、みんなは

修学旅行気分でけっこう楽しく振る舞っていた。親の願いとは別に、当地人たちには兵隊に採られると困るといった雰囲気はなかった。

検査は、玉湯小学校を会場として実施された。まず、身長、体重、胸囲等の測定から始まり、続いて内科、眼科、性病の検査があり、終わって各町村毎に教室に入って、尋常小学校卒業程度の国語と算数の学科テストが実施された。

総ての検査が終了すると、やがて連隊区指令部の係官から、個人別に結果の申し渡しが行われる。一同が整列している前で、一人づつ係官の前に呼び出され、「甲種合格」とか「丙種不合格」とか宣告され、それを大きな声で復唱しなければならない。私は、「小松正雄甲種合格」と宣告され、直ちに大きな声で「小松正雄ハ甲種合格デアリマス。」と復唱した。復唱した瞬間、軍隊に入るといふ悲壮感よりは、むしろ甲種であったという成績に、少しばかり誇らしい気分にもなった。

家族が、あれほどにも軍隊を忌避したにもかかわらず、「短現の廃止」「徴兵検査の甲種合格」でその夢は水泡に帰してしまった。しかし当の本人は、軍隊という未知の世界、更には外地に出征といった好奇心もあつて、至つてのんきなものであった。

(2) 入隊

検査の終了後も、直ちに津和野小学校の職場に帰って楽しい日々を送っていた。その年の秋になって、「昭和十五年十二月一日、鳥取中部第四十七部隊二入隊スベシ」との通知を受けた。軍隊の年度は十二月から翌年の十一月末までなので、これは最も早い入隊である。本来ならば、我々は松江の連隊に入るはずであるが、この年の松江連隊は軽戦車の部隊となっていたので、同じ十師団の管下である隣の鳥取部隊への入隊となったのである。

家庭からは、早く帰郷して入隊準備をするようとの矢の催促であったが、担任している児童たちとも別れ難く、つい延び延びになって、結局、十一月十五日の「紀元二千六百年記念祝典」を終えてから帰ることになった。学校では、教員籍はそのままとして、休職扱いをもらって入隊することになった。

出発の前夜、同学年の松浦、今井の両先生が、物資がまれになった折から、どこから算段されたのか、リング酒の一升ビンと板付きのかまぼこ三本を持ち寄り、夜遅くまで送別会を開いて下さった。板にこびりついたかまぼこを爪でこすりとって食べたことは、今でも記憶に新しい。また出発前に、高等科二年生の齋藤静枝さんが、「千人針」を贈ってくれたのもまことに嬉しく有り難いことであった。千人針というのは、白い木綿の腹巻に、赤糸で千個の結び目を縫い付けたもので、女の人から出征して行く者に贈られ、弾丸よけになるといわれていた。結び目を縫うのは女の人だけで、一人が一個しか縫えない。従っ

て千人針を作る人は、各家を回り歩いて縫ってもらい、時には街角に立つて道行く人に依頼するという大変な苦勞のいるものである。銃後に在る女の一针一针の至情が、それを肌に着けていく兵隊を敵弾から守ると思われていた。支那事変の当初は、全国的にごく普通のこととして行われていた。またでき上がった千人針の中央に「死線を越える」という意味合いから五錢銅貨を縫い着けたり、また「苦戦を越える」という意味から十錢銅貨を縫い着けるといったことも行われていた。

十一月十六日の朝、講堂で全校生徒によつて送別壮行の式が行われ、津和野駅頭では児童生徒が汽車が見えなくなるまで、日の丸の小旗を振つて見送つてくれた。

十一月三十日、岩坂村の村界に近い日吉公園に集合した入隊者は、村の在郷軍人会や婦人会等の壮行激励を受けた後、沿道に並んで日の丸の小旗を打ち振る村民に送られて出発した。村を出発した一行は九名、後々、戦争が拡大し激烈となり、その半数以上もが戦死しよう等とは夢にも思わなかった。

鳥取の旅館で一泊した後、翌十二月一日、みんな揃つて鳥取連隊の営門をくぐった。これで除隊まで何年かかるか娑婆しゃばとは一切のお別れである。鳥取県の全域、島根県の出雲部から集まった数百人は、営庭に集められ、それぞれの中隊に配属になった。私は第十中隊であつた。

中隊に着くと、早速、軍服の上下、じゅふん 繻絆（シャツ）袴下（ズボン下）雨外套、靴、帽子それに、赤地に星一つという「陸軍二等兵」の階級章が支給になった。この時、こうけい 滑稽だったのは、支給された靴がブカブカの十二文（三十センチ位）だったので、係の兵に「大きすぎるのもう少し小さいのとかえて下さい」と申し出ると、彼に「ばか、軍隊という所は、靴に足を合わせるところだ」とどなられたことだった。その場では、小さ過ぎる靴よりましかと思つて我慢したが、結局数日後にちょうどよいものと取り替えてくれた。それにしても「靴に足を合わせろ」とは、日本の軍隊の性格を實によく表した言葉であると今でも苦笑することである。

四、中支派遣

(1) 中支へ出発

入隊して間もなく、新兵は全員中支に駐留する歩兵第五十三連隊に派遣されることが指示された。そして一週間後の日曜日、家族との面会が許可になった。みぞれ混じりの雨が降る中、家からは近所の竹馬の友だった石原満郎君の家族と共に、重箱にありつたけのこ



入隊直後、竹馬の友 石原満郎君と
(彼は、ブーゲンビルの激戦で戦死)

しい気持ちで出発した。その時の私は、戦地へ赴くという悲壮感よりむしろ、話には聴いていたが未だ見ぬ中国に対する好奇心といったものが大きく、案外と楽しい気持ちでの出発であった。

鳥取から、山陰線、伯備線、山陽線と乗り継いで、広島の宇品港に到着、師団管下の全初年兵がここで乗船、五、六隻の船が船団を組んで瀬戸内海を西航、玄界灘に出て、一路

馳走を入れて面会に来てくれた。これが家族と会う最後になるかも知れないという気持ちである。

年の暮れもおしまった十二月十八日に、鳥取兵営を後にした。沿道を埋め尽くした人々の万歳の歓呼の中を晴れがま

上海目指して進んだ。

初めて日本を離れる感慨はさすがに一入で、九州の山々がだんだんと薄紫にかすんで行くのを見て、祖国への離別の情、これから大陸での生活に対する不安な気持ちも高まってきた。甲板に立つて薄れ行く山々を眺めているあいだに、だれからともなく当時流行していた軍歌が歌い出され、やがて大合唱になつていった。

あーあー 堂々の輸送船　さらば祖国よ　栄えあれ

遙かに　拜む　宮城の　空に誓つた　この決意

輸送船は貨物船を改装したもので、貨物室の中に、高さが一メートルほどの床を何段にもはりつめた、蚕棚そっくりの仕様である。中では、寝転がっているのが精一杯で、坐つていても頭が天井につかえて首を曲げていなければならない。何ともいえない悪臭が船室に漲る。外海の船に乗ったのは初めてなので、船よいの気味も加わつて食事が喉を通らない。

二十二日朝、船は濁水を満々とたたえて流れる揚子江に入る。河といつても六道湖の東西位の河幅である。対岸の樹がかすんで水の上から少し見え隠れする。やがて支流の黄浦江に入り上海郊外の鉄道栈橋に接岸した。民家の白い土塀、そりのある黒瓦の屋根、柳であろうか民家の周りにまばらに生えている樹、すべてが絵や写真で見た通りである。ど

んな所に連れて行かれるのかという不安もあったが、ともかくも異国の地に降り立つたという感激で一ぱいであった。

やがて、各中隊毎に別れて貨物列車に載せられる。上海駅を出発した列車は一路西へ西へと進んで、やがて歌で名高い蘇州も過ぎて、常州の駅で下車させられた。ここは、我々の大隊すなわち第三大隊本部のある町で、城壁を巡らせた結構大きな町である。第十中隊要員の二十名余りの者は、ここから更にトラックに乗せられて、中隊の駐屯地である「戚

墅堰」に運ばれた。戚墅堰は常州の東約十五キロメートルの鉄道沿いに在って、小さな発電所と機関車の修理工場のある要地である。中隊の兵舎は、発電所の一角にあつて、平素は、工場警備および鉄道警備に當つていた。

(2) 初年兵教育

初年兵教育の教官は、予備役召集の繩船中尉、班長は鳥取市出身の現役兵坂上伍長、班付上等兵は岡山出身の島上上等兵と他にもう一人いた。昔から軍隊では、初年兵の内務班（営舎内の居室）での私的制裁は有名である。些細な落度を捜し出しては、なぐるいじめの連続である。軍



隊には「初年兵と軍装の整頓とは、叩けば叩くほどよくなる。」と言い伝えられている言葉さえあるほどだ。軍隊では、頬を叩くことをビンタという。銃にゴミが付いているといったはビンタ、食事が遅いといったはビンタ、履物のそろえ方が悪いといったはビンタ、行住坐臥^{ざが}ビンタの種にならないものはない。軍隊では、階級が一つ上なら絶対服従である。殴られる度に「有り難うございました」と言わなければならない。反抗でもしようものなら直ちに営倉（軍隊の留置場）行きである。全くばかげたことではあるが、殴られるのもその度を越してしまうと、腹立たしさや怖いのを通り越して、「何でもしやがれ」といった開き直った気持ちが出てくる。あるいはこの気持ち、後々、戦場で弾丸の下に入った時に役立つのかも知れないが、ともかく、軍隊の伝統である私的制裁は、初年兵が越えなければならぬ大きな山である。

日中の野外訓練は、兵器の取扱いや戦闘の初歩訓練が主である。普通、初年兵教育は、三か月間みっちりやって、その後、第一期の検閲をするのが常であるが、私たちは、初めから戦地における訓練であったので、約一月半経ったところから直接に、鉄道警備の分哨勤務や、工場の歩哨^{ほしやう}に立たされることが多くなった。

十二月、中隊に到着して間もなく、私は教官の縄船中尉の当番兵に指名された。当番兵というのは、将校の身のまわりの世話をする兵のことであって、食事の上げ下げ、被服の

洗濯、居室の整理をはじめとして、こまごまとした日常の雑事に至るまで万端にわたって世話をするものである。日常の自分の訓練や勤務の上に更に当番の勤務をするのだから大変である。よほど要領よく立回ることが求められる。しかし、その分余禄よろくが無い訳ではない。昭和十六年の正月、縄船中尉が近所の金持ちの村長の家へ招待され、私はその護衛としてついて行った。その時、図らずも中国の田舎いなかの上流家庭に接し、また、正式の支那料理にも接することができた。

家の構えは普通の家より少し大きい程度である。まず入口の土間の小さい部屋に案内された。そこでは、ピーナツ、かぼちややひまわりの種の煎いったのが大きな皿に用意されていた。そして塩味も何もない玉子汁が出される。客はしばらくの間、皿に盛られた種子たねを食べ、その皮をそこら中に吐き散らす。土間が相当散らされたころ案内人が現れる。案内人に従って二階へ上る。そこには五つ六つの部屋があり、それぞれに家族が住んでいる。二階から隠し階段かくしを伝って三階に上る。三階にも四つ五つの部屋があり、そこにも何家族かが住んでいる。三階から更に隠し階段を使って、いよいよ主人夫婦の住む屋根裏の四階に行き着く。

主人の部屋は、十畳位の広さだったろうか、ベッド、たんす、テーブルと豪華な家具がゆつたりと配置されている。ベッドの横には、中国特有の美しく装飾された五十センチほ

どの高さのある美しい壺つぼが置かれている。便壺である。毎朝召使いが下の河できれいに洗うのだそう。この家の造りは、安全を考え、強盗等に備えるための造りであり、上の階に住む人ほど、主人との関係が近いということであった。

待つほどに、料理が運ばれて来た。大皿から小皿に取りわけて賞味する。中尉から、「少しずつ取って後にたくさん残し置け」と注意される。聞けば大皿の料理は、次々と下の階の部屋にまわして、この家の者全員で食べるのだそう。料理は次々と運ばれて結局十五品位出たであろうか。最後は御飯の砂糖炊きが出たが、もう満腹で口にする気にもなれなかった。

(3) 分哨勤務

十六年の正月が明けると、作戦が始まって古い兵隊が次々と出動していくので、鉄道警備や工場警備の分哨ぶんしょう（要点に十名ばかりが駐屯とんして警備の拠点となる所）には、勢い初年兵が付くことになる。

私がよく勤務を命ぜられたのは、中隊から鉄道沿いに西に四キロほど離れた煉瓦造りのトーチカの分哨であった。鉄道警備が任務である。上海・南京間の鉄道は、軍の輸送の動脈であったが、当時、便衣隊（民間人の服装をした中国兵）によって時々爆破されること

があつた。それを防ぐため線路の両側に高さ一・五メートルの電流鉄條網を張り、約四キロメートルおきに分哨を設けて警備兵を配置した。

分哨の勤務者は、交互に立哨、動哨、控、仮眠の四交替でそれぞれ一時間ずつ勤務する。立哨というのは、トーチカの前に立つて四囲を絶えず警戒するもの、動哨というのは、担当する線路の側を往復しながら警戒するもの、控は分哨内に在つて電話当番となり、絶えず隣接分哨や中隊本部と連絡をとるものである。特に朝の一番列車がよくねられるので、早晩には爆薬を仕掛けた配線をさぐるため、鉄道の両側を二本爪の鍬でひつかいて歩く。これはなかなかの重労働である。仮眠は、何時でも急に対応できるよう、銃を体の横に置いて軍装したままで仮眠するもので、もちろん靴も巻脚絆もはき腰には前後に合わせて百二十発の弾薬を着けたままである。

中支の冬は、山陰地方と大むね同じ氣候で、時折吹雪いたり雪が積つたりする。雪の中でも勤務は平素と変わることがない。立哨、動哨は大変であるが、平素寝つきの悪い私にとっては、仮眠時間はほとんど寝ることもできず、僅かに横になつて体を休める程度が精一杯であつた。従つて、立哨中こくりこくりやつてピントを食つたことも屢々であつた。

(4) 分哨の炊事当番



歩哨に立つ

分哨につくと、初年兵が交替して朝昼晩の炊事をしなければならぬ。入隊するまでは母が炊事をするのを見るくらいがせいぜいであつたが、ここでは、実際に火を焚き鍋釜で煮炊きをしなければならない。

炊事で一番困つたことは、火焚きである。ここの燃料は木のかわりにすべて藁である。藁を燃すにはこつが必要である。薪のようにしたのでは、すぐに灰が積つて炎が消えてしまう。かまどに投げ込んだ藁をう

まく燃すには、まず一握りほどの藁の燃え易い先の方を、くるつと曲げて軽く結んでから燃やす。灰が積もつて燃え難くなるのを防ぐため、片手に棒を持っていて絶えず灰を両側にかき上げて、中ほどに空気の通り道を作る。しかし、見よう見まねのやり方では、飯が煮え上がるまでコンスタントに火を燃すのは難かしい。うっかりすると芯のあるご飯ができてしまう。

次に失敗して古年兵からどなられたのが芹せりの使い方であつた。中国では衛生状態がよく

ないので、食べ物から伝染病にでもなれば大変と、お汁の具によく火を通すよう心がけて炊事に当った。たまたまお汁の具の材料として芹がきいていたので、これも他の材料と一しょに鍋に入れて火を通して炊き上げた。これでよしと古年兵に差し出したところ「ばか野郎」の怒声が返って来た。「芹を煮るばかがあるか。香氣も齒ざわりも無くなってしまうではないか。芹は鍋を火からおろしてから入れるものだ。」と。一つ利口になったが、しかし今でも「もし、伝染病の菌でもついていたらどうなったかな。」と思うことである。

炊事当番で、もう一つどなられたことがある。それは「お粥^{かゆ}づくり」である。十六年の三月末ごろ、和歌山県出身の古年兵だけいる遠くの分哨に配置されたことがあった。その時、朝食は毎日お粥にするというのである。和歌山や奈良の地方では、毎日の食事は、お粥二回ご飯二回だそうである。お粥についての知識としては、病氣のとき土鍋に米を入れ、だぶだぶの水を入れて炊き上げた物で、上のねばねばした所を「おも湯」、下のやわらかいご飯を「おかゆ」といって、食べさせてもらった記憶がある程度である。

そこで、鍋に米を入れ、水をたっぷり張って、下からどんな火を焚く。鍋の中の水はぐらぐらと煮え立って、米は湯の中で踊って十分軟らかくなったころ、火から下ろして上ずみを捨てて、軟らかいお米の部分を盛りつけて持って行った。結果は、「こんなものがお粥と言えるか。」であった。幸いに親切な古兵がいて、模範に炊いて見せてくれた。炊



幹部候補生に合格して座金の
襟章を受ける

(5) 幹部候補生受験

いた後、お米が十分に水分を吸ってふくれるだけふくれた後には、水分が残らないような水加減が必要であつた。従つてお粥の粒もご飯と同じ形である。食べてみるとさすがにおいしい。飯の代わりに食べるお粥とはこんなものかと合点した。

炊事も苦しい事ばかりでは無い。たまには楽しい事もある。それは、冬の警備地によく雉^{きじ}が来ることがある。お手のものの小銃で仕止めて、雉鍋を作ったこともある。

陸軍には「幹部候補生」という制度がある。初年兵の教育が終了した時点で、中等学校以上の学校を卒業した者の中から選抜して、特別な教育を施し、二年後の現役終了時には、予備役将校に任じようというものである。戦時下で多数必要とされる下級将校を充足するのが、そのねらいである。

私個人にとって、この試験に合格するか否かは、これからの長い兵役生活

を、将校で過ごすのかそれとも一兵卒として過ごすのかの大きな分かれみちである。従つてその受験勉強には熱が入るといふものである。

第一次試験は四月の初めに行われる。そこで中隊では、八名の受験生のために、消燈を一時間延期した勉強室を作ってくれた。日々起床から消燈までは、一般兵と一緒に訓練を受けたら、勤務に就くので、勉強は専らこの勉強室で行うことになる。しかし、受験対象となる科目は、軍人勅諭、作戰要務令、歩兵操典、そのほか、兵器、被服、内務等々十冊に近い典令類である。従つて毎日一時間の勉強ではとても足りない。そこで、勉強室が終つた後、部屋に帰つて寝台の中で、頭からすっぱりと毛布をかぶり、掌に納まるほどの小さな懐中電灯を点して、光が洩れないよう気を配りながら勉強を続ける。

試験は、学科試験それに射撃大会の成績と内申によつて行われるが、射撃も、百点満点の六十八点と中隊の最高の成績を挙げ、無事第一次試験に合格することができた。

中隊からの受験者八名中、第一次の合格者五名、六月に実施された第二次試験に合格した者は、四名であつた。そのころのような勉強をその後もずっと続けていたならば、もっと偉い人間になつたはずだと當時を想い出して苦笑する。

(6) 中支の春



中支の運河

揚子江下流域の中支は、縦横に運河が走り、そして杭州から北京に通ずる大運河も通っている。この地方の冬は、時折吹きつける北風、そして三、四十センチ位積る雪等わが山陰地方とほとんど変わらない。しかし春は全然違っている。内地では想像もつかないほど、華麗なものである。

三月の二十日過ぎ、南東の風が吹いたかと思うと、もう昨日までの冷え込みはどこかに吹きとんで、水面も周りの空気もそして空の色までが、一気に春気に満ちる。大地の草の根が一斉に芽を吹く、集落や水辺に植わっている柳に、新芽がのぞいたかと思うと、僅か二、三日で薄緑一色になる。数日前までは枯木だった桃や杏が一気に開花する。街に市がたつて、人の賑わいと喧噪が復活する。どこにこんな人がいたのかと思われるほどのたくさんの人々が、重たい綿入れを脱ぎ捨てて、軽やかな夏の支那服の裾をひるがえして行き交う。虫たちが一斉に空に群れる。冬からほんの数日で、一気に春爛漫となる。

この春もわずか十日ほどで終りを告げる。四月に入

るともうこの地方は夏である。日中の日差しは急に強くなって、日除けの帽子か傘がないと外に出られない。蛙が声高に鳴き立てて寝苦しい夜となる。蚊までが人を悩ますのである。わずか十日間の春、日本の二か月にわたる春の移ろいを、この十日ほどに凝縮して演出されるのが中支の春である。

五、北支へ移駐

(1) 王楼分哨勤務

昭和十六年五月、連隊は中支の配備を撤して、三百キロ北北西にある、徐州付近の警備に就くことになった。徐州は鉄道交通の要衝で、支那事変の初期、彼我の大会戦のあった所であり、内地でも、火野葦平著の「麦と兵隊」の舞台として有名になった地である。中隊は列車によって南京まで行き、揚子江を渡り、浦口から再び津浦線を北上して徐州に到着した。

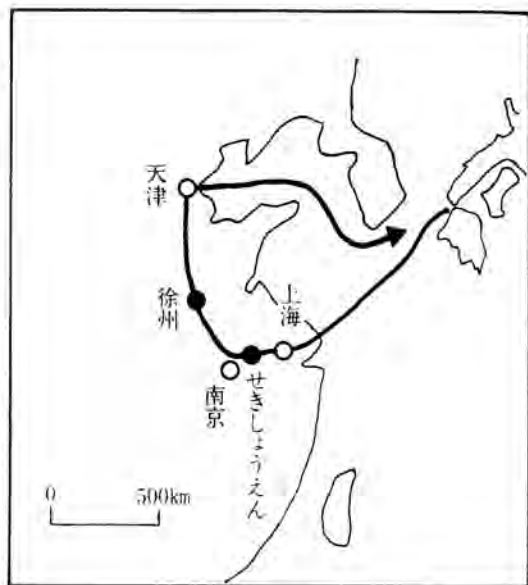
ここでの中隊の警備地区は、徐州の南東約十キロ付近の広い平地の真中であつた。私は中隊本部から五キロほど東に向つた、王楼という小さな集落に作つた分哨に配属になった。

兵力は、約一箇分隊（十五名程度）である。分哨は部落の外れにある一軒屋を接收してこれに当て、屋根の上に望楼を造り、周りに防禦用の鉄条網と壕を掘った簡単なものであった。望楼から四方を眺めると、見渡す限りの大平原である。そして麦と高粱こうりやんの畑がどこまでも続いている。その中に柳の緑をたたえた部落が点在する。地平線という言葉は知っていたが、実際に見るのは初めてである。比較的治安もよく、敵襲の心配も薄かったので、至つてのんびりした毎日であつた。しかし、夜になって古い土壁から這い出して来る「さそり」と、春先の万丈の黄塵には閉口した。防塵眼鏡として、水中眼鏡が支給されていたが、黄塵が起ると呼吸もでき難くなる。口にタオルを当てていても、すぐに口の中は細かい砂でザラザラになる。部屋の中は、兵器も持ち物も黄砂で真黄色になつてしまふ。

五月末というのに、暑さは内地の真夏の暑さを凌いで、全く焼け付くようである。これもまた一面では、初年兵にとつて有り難いことでもあつた。というのは、初年兵は古い兵隊の洗濯を引き受けなければならないが、この暑さで、丸洗しほいした服を絞らないで干して置いても僅か数時間で、乾き切つてしまうからである。

(2) 幹部候補生の教育隊

六月初めに、連隊内の幹部候補生試験に合格した者が、徐州の連隊本部の屯営とんえいに集めら



中国における行動図

れ「幹部候補生教育隊」が編成された。六月から三月経った八月末に、第二次の選抜試験を行って、将校コースの甲種と、下士官コースの乙種に分けようというのである。

教育は、歩兵隊と重火器隊に別れて実施されたが、何れも炎天下で、猛烈を極めるものであった。午前午後共に概ね三時間ずつの演習訓練で、しかも約二キロメートル離れた演習場への往復は隊伍を組んだままの駆け足である。

演習は黄土の畑の中を這い回る戦闘訓練が中心で、交互に分隊長になったり、小隊長になったりして候補生である兵を指揮する。毎日三十五度を越す焦げつくような炎天下で、むせかえる熱砂を体中に浴びながら、匍匐前進や突撃の反復である。いくら歯をくいしばって頑張っても喉の渇きは、とても我慢し切れるものではない。それに負けて、そこら辺りの水を飲んだ者は確実にアメルバー赤痢に冒される。私は、そんな時には高粱の茎を折って嚙るこ



教育隊兵舎前で

とにしていた。その苦い汁が口に入ると、反射的に粘った唾液が出てくる。それで一時の渴きが医される

往復の駆け足には、志願して軽機関銃を担ぐことにしていた。当時の軽機関銃は四一式といって、鉄の塊のようなもので、重さは優に小銃の二倍分はある。自分で自分に気合いを入れて、へばらないようにするためである。おかげで、灼熱の炎天下、三か月の教育期間中一日も休むことなく頑張り通すことができた。そして、第二次試験にも無事合格することができた。第二次試験に合格し

た者を、甲種幹部候補生といって、予備役の将校コースを歩むことになる。

(3) 劉大庄^{りゅう}付近の戦闘

九月二十日過ぎのある夜、消燈時間が過ぎて、昼の訓練の疲れで既にみんなが寝入っているとき、突然「非常呼集」の声でたたき起こされた。教育期間中に、非常訓練は大して

珍しい事でもなかったので、みんながぶつぶつ言いながら軍装を整え始めた。すると、弾薬受領者、糧秣受領者を差し出すよう指示がでたので、これは只事ではないなという気がして来た。何しろ、入隊以来初めての作戦参加である。何をどの程度用意したらよいのか、全くの手さぐりの状態である。

漸くにして準備を整え営舎前に整列して、直ちに出発となった。暗闇の中を指揮官に従って唯々と歩くのみである。どのような戦況なのか、何処へ向かって行軍しているのか一切が不明である。歩きながら、ふと気付いたことがある。それは千人針の腹巻きを忘れたことである。千人針が戦闘の必需品でもなければ、防弾チョッキの役割を果たすものでもないことは分かりきっている。それにもかかわらず、忘れたということが気持ちを不安にさせる。平素は、「千人針なんか何の役にも立たない。」と嘲笑していたものだったが、いざ事に臨んだときには、こんな気持ちになるものかと自分でも不思議であった。

行軍は、一時間に一回位の小休止をとりながら、果ても無く続いていく。集落と集落の間を縫うようにしての行軍は、遂に夜明けを迎えた。夜が明けてもなお行軍は続く。徹夜で歩いたため、いまは歩きながら眠るといったさまである。機械的に足を動かして、おぼろに見える前の者の姿を追って歩く。前が止まれば、どすんと前につかつかって止まるといった状態である。

この日も炎天を冒しての終日の行軍である。情報によれば「約千名の敵が、北から南に向けて移動中で、これを友軍が三方向より追撃中」とのことである。結局その夜も、小休止を繰り返しながら夜びつての行軍であった。文字通りの「不眠不休」である。

三日目の朝、ようやく戦場へ着いた。彼我の激しい銃声が聞こえる。一昼夜半に及ぶ行軍の疲れなど一ぺんに吹きとんで緊張する。敵は土壁を巡らした大きな集落に立て籠って、防禦の態勢をとっている。我が方はこれを三方から包囲する形で攻撃を進めている。私たちの教育隊は、直ちに左翼隊の増援として、敵の左側を前進して、後方に進出し、退路を遮断するよう命令を受ける。

戦場になつてゐる畑は、一面が三、四十センチほどに育つた豆畑である。敵前五百メートル位から、散開して各個前進（各人が、横に十メートル位ずつ間隔をあけて目標に向つて前進する。前進に際しては、各個に走り出て三十メートル位走つた所で体を伏せ射撃をする。）をする。この戦闘では、常に右側から射撃を受けるので、右隣りの者を狙つた敵弾は自分の近くに来る。立ち上がつて走り出すと、目標が大きくなるので、敵から狙撃される。小銃の射撃では、弾丸をこめて、狙いを定めて、発射するには、およそ七秒の時間がかかるとされている。そこで攻撃する側は、豆畑から身を起して、全力で七秒間ぐらすなわち三十メートル位走つて、パツと身体を伏せる。それに前後して敵弾がピューンと

くる。この戦闘では、私は常にまっ先に走り出すよう心懸けた。二番手以下の者は、どうしても敵からの狙いがつけ易くなるからであり、また他の者を撃った流れ弾丸に当る公算が大きいからである。

戦闘は、友軍の砲兵の支援もあつて約一時間ほどで、敵の総退却となつて勝利のうちに終わることができた。遺された何百という敵の屍体を見て、勝ち誇るといふ気持ちよりも、何か空しい気持ちになつた。私にとつての緒戦であつたが、我が方に有利な戦況の故もあつてか、演習の延長のような平常心で戦うことができた。

この戦闘で、同じ中隊出身の幹部候補生で、鳥取市出身の「松井積」君が戦死した。戦闘が終つて遺体を荼毘に付する煙を眺めながら、人間の運命について考えさせられた。

六、豊橋陸軍教導学校・鳥取部隊

(1) 入学

作戦が終了して、帰隊すると入学命令が待っていた。

「豊橋陸軍教導学校へ入学ヲ命ズ。入学ハ昭和十六年十月一日トス。」予備役将校となる

ための特別教育を受ける学校である。当時、現地の保定ほていに予備士官学校が設けられていたので、多分保定行きであろうと思つていた矢先に、内地の学校への入学命令であつたので、喜びも一入しよであつた。陸軍伍長の階級章を渡され、喜びの内に旅装を整えて、五十名ばかりの候補生が徐州駅を後にしたのは、九月二十六日であつた。

九月二十七日、天津の外港である太沽タイコウで乗船し、船は黄海を一路南下、懐しい故国日本へ向かう。海上は、しけ気味で軽い船よになつたが、同年兵ばかりの気易さもあつて、船内は楽しい気分に溢れていた。一夜明けて玄界灘を越え、九州の山なみが紫色に見えてくる。やがて点在する小島の近くを通る。島に生えた「松の木」を見ると祖国日本に帰つたなあという感を深くする。

船は関門を過ぎて瀬戸内海に入り、やがて広島港外の似島にしまに接岸する。ここは日露戦争以来陸軍の検疫所の在つた所で、所持品や兵器被服の消毒はもちろんのこと、昇汞しょうかうの入つた風呂に入れられて、体も余す所なく消毒される。

広島に上陸し、入学までに一日の余裕があつたので、一路懐かしのわが家に帰ることにする。十か月振りの家族との再会も、僅か一夜であつたが、家族みんなでの歓待だらんの中で、久方振りに乾いた心を癒いやすことができた。

九月三十日夕刻、無事に愛知県豊橋市の二川ふたかわにある教導学校の門をくぐつた。

(2) 教導学校の生活

豊橋には、陸軍の演習場が隣接して二つ設けられていた。一つは東海道線沿いの、長さ幅共に六キロメートル四方の高師^{たかし}演習場と、もう一つは幅が四キロメートル長さが十五キロメートル太平洋沿いの天伯演習場である。高師の方は平坦で草原も多く、天伯の方は起伏に富んでいて大砲の実弾射撃も可能な広大な演習場である。従ってこれ等を使つての毎日の演習訓練は、苛^か烈^{れつ}といつてもよいほどの猛訓練で、生徒の間には「鬼の天伯・涙の高師」といった言葉も聴かれるほどであつた。

学校の日課は、午前中にあるいは夜に若干の学科の授業があり、後は徹頭徹尾小隊長としての実践的な訓練である。特につらかつたのは、寒夜の夜間戦闘訓練、なかでもその仮設敵を命ぜられた時である。豊橋の冬は、いわゆる「空っ風」が吹いてとても寒い。寒い



教導学校へ入学当初

というより肌に痛いといった方が適當かも知れない。従つて夜間訓練では、走り回る方が楽で一か所に留まつている方が辛い。仮設敵（攻撃訓練をする際に、敵を模して攻撃の目標となる兵）となつて攻撃側が眼前に現れるまで、じつと待つてゐる時の身に沁^しみる寒さは、何にも例えようがない。何しろ冬時分は、五十メートルほど離れた風呂場から

営舎に帰り着くまでには、濡れたタオルが凍てついて棒になるほどだから。

学校六ヶ月の猛訓練を風邪一つひかずに元気に過ごせたのは、中国での厳しい訓練と、そして、やがて任官して、多くの兵たちの指揮官になるという気力がそうさせたものであろう。

(3) 大東亜戦の勃発

昭和十六年十二月八日、当日は戦術についての試験の日で、みんなが教室に集まって試験の勉強をしていた。朝九時過ぎだったと思うが、突然教室のスピーカーが音楽を流し始めた。みんなは一斉に勉強の手を休めて静かになるや「帝国陸海軍は、本八日未明、西太平洋において米英軍と戦闘状態に入れり。」それに引き続いて真珠湾攻撃の詳報と戦果を報道し始めた。誰もが勉強などは放り出して、くり返しくり返しのラジオ放送に聞き入った。「大変なことになったなあ」という興奮と「我々のこれからの戦闘は、支那だけでなく、アメリカも相手にするのか。」と卒業後の任務についての想いが交錯し、気持ちが高まるばかりであった。

しかし、学校側の対応はまことに平静で、試験も訓練も全く平常通りで、大東亜戦の勃発に対する説明や講話等がある訳でもなく、何事も無かったかの如く日々の予定に従った

毎日であり、何かしら物足りなさを感じたものである。

後々になって、「真の教育とはそうしたのかな」と感心もしたものである。また、我々師範学校の卒業生から短期現役兵制度をとりあげたのも、今日の開戦を予想してのことだったかも知れないと思った。

(4) 見習士官に任官

昭和十七年三月三十一日、いよいよ教導学校を卒業すると、将校待遇の「見習士官」である。それまでの兵隊が着けていたいわゆる「ごぼう剣」を、日本刀の将校用軍刀に代え、

晴れがましい気分になる。

卒業時、中国の原隊げんたいに帰る者と、鳥取の歩兵第二十一連隊に転属する者と二手に分かれた。私は後者の鳥取組である。同期生四十名が、真新しい軍刀を腰に吊り肩をいからして、入隊時にくぐった懐かしい鳥取連隊の営門を入った。門前で立哨している衛兵が「捧げ銃」の敬礼をしてくれるの



見習士官に任官

も面はゆい感じで、「これで将校になった」という実感が湧いた。

鳥取では、他の四名の者と一緒に第一中隊に配属になった。中隊長は、ビルマ戦で大隊長として仕えた、陸軍士官学校出の山根光雄中尉である。日々の訓練は、専ら、小隊長の野戦における指揮能力の向上を目指して行われた。特に夜間訓練では、山地や不整地を地図と磁石だけによって、正しく所定の位置に到達する訓練が重視された。回を重ねる毎にその能力も向上し、ついには、暗中、山地千メートル進むのに誤差二十メートル以内というまでになった。

訓練のない夜や、休日には外出自由である。給料を貰った当分は、同僚と一緒に夜の飲食街へ繰り出したものである。また自由外出ができる範囲が決まっていたので、休日でも家に帰る訳にも行かず、近郊の岩井温泉に行つて休養を兼ね、読書や勉強をした。

夏になると、同期生は、十三名を残して、後の全員が、北支派遣軍の方へ転属していった。私は残留組となつて、第十中隊の教育隊教官に任命された。教育隊とは、在朝鮮師団の乙種幹部候補生（幹部候補生中、第二次試験に合格しなかつた者で、下士官候補者）を三か月間預つて教育する施設である。

朝鮮師団から来る候補生の中には、三割位の朝鮮兵がいる。彼等は概して優秀で気力体力に優れ、兵としての成績や態度にも優れている。私は、教育終了時の成績表を作製した

際、一位から三位までを韓国人の兵に、四位を日本人兵にして上申した。すると、当時大隊長であった藤岡少佐から呼出しがあつて、「なぜ日本人が一位ではないのか」との詰問である。私は、率直に教育期間中の成績について報告し、内申書の正当性を主張した。暫く考え込んでいた大隊長は、「それなら聞くが、韓国兵と日本兵とではどちらに大和魂が多くある。」と。これには私も参つて答えられないでいるとすかさず「だから日本人を一番にしろ」と命令口調で指示された。上官の命とあらば、それに従うしかないのである。この一件から、大隊長とは特に親しくなり、ビルマに従軍してからも何かと好都合のことが多かった。大和魂事件は、軍隊の特徴をよく表したもので、後々まで想い出深いものである。

(5) 陸軍少尉に任官

昭和十五年十二月一日現役兵として入隊してから丸二年の期間を終え、十一月末に現役満期を迎えた。

昭和十七年十一月三十日、現役満期ヲ命ジ予備役ニ編入

同 年十二月一日 陸軍少尉ニ任ズ 正八位ニ敍ス 臨時召集ヲ命ズ

十二月一日には、待望の少尉への任命が発令になり、正式に将校への仲間入りをするこ

になった。なお引き続きの臨時召集のため、現役満期で帰郷することなく軍隊勤務を続けることになった。

軍隊では、下士官と兵は隊員であつて、衣食住兵器等の総てを隊から支給され、兵営内に居住して厳重な軍規のもとで起居しなければならない。しかし将校になると衣食住や兵器に至るまで個人が負担する。軍服はもとより、帽子から靴に至るまで所定のものを発注し購入して着用する。住も兵舎から出て下宿生活をしなければならない。軍装の軍刀、双眼鏡、拳銃等も個人で調達するのである。

隊内の礼式についても、兵営の玄関である営門歩哨は、将校の出入に対しては「きき捧げ銃」の敬礼を行い、将校が指揮し引率する隊列の出入に際しては、衛兵全員が整列してラッパの吹奏をすることになっている。

少尉の給料は、月額が七十五円であつた。これを新卒教員の月給四十五円に比較するとかなりの高額である。

予備役の将校は、士官学校卒業の現役将校に比して昇進が遅かつた。通常、少尉の実務二年で中尉に、中尉の実務四年位で大尉に昇進し、概ね大尉が進級の限度であつた。しかし職務上の権限や責任は、現役たると予備役たるとに変わりはなく、指揮官として、重い責任にも変わるところはない。